



Title	「悲傷亡妾」歌群論：結びの五首を中心に
Author(s)	原田, 直保美
Citation	国語国文研究, 133, 12-30
Issue Date	2007-12-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93368
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_133-12-30.pdf



「悲ニ傷亡妾」歌群論

——結びの五首を中心に——

原 田 直 保 美

はじめに

十一年己卯夏六月大伴宿祢家持悲ニ傷亡妾ニ作歌一首

①今よりは秋風寒く吹きなむをいかにかひとり長き夜を寝む

(三四六二)

大伴宿祢書持即和歌一首

②長き夜をひとりや寝むと君が言へば過ぎにし人の思ほゆらくに

(四六三二)

又家持見ニ砌上瞿麦花ニ作歌一首

③秋さらば見つつ偲へと妹が植多しやどのなでしこ咲きにけるかも

(四六四四)

移レ朔而後悲ニ嘆秋風ニ家持作歌一首

④うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み偲びつるかも

(四六四五)

又家持作歌一首并短歌

⑤我がやどに 花ぞ咲きたる そを見れど 心も行かず はしき
やし 妹がありせば 水鴨なす ふたり並び居 手折りても
見せましものを うつせみの 借れる身なれば 露霜の 消ぬ
るがごとく あしひきの 山路をさして 入日なす 隠りにし
かば そこ思ふに 胸こそ痛き 言ひも得ず 名付けも知らず
跡もなき 世間なれば せむすべもなし

(四六六)

反歌

⑥時はしもいつもあらむを心痛くい行く我妹かみどり子を置きて

(四六七)

⑦出でて行く道知らませばあらかじめ妹を留めむ置かましを

(四六八)

⑧妹が見しやどに花咲き時は経ぬ我が泣く涙いまだ干なくに

(四六九)

悲緒未レ息更作歌五首

⑨ かくのみにありけるものを妹も我も千歳のごとく頼みたりけり (四七〇)

⑩ 家離りいます我妹を留めかね山隠しつれ心どもなし (四七二)

⑪ 世間し常かくのみとかつ知れど痛き心は忍びかねつも (四七二)

⑫ 佐保山にたなびく霞見るごとに妹を思ひ出で泣かぬ日はなし (四七三)

⑬ 昔こそ外にも見しか我妹子が奥つきと思へば愛しき佐保山 (四七四)

右は、『万葉集』卷三にある大伴家持の作とされる「亡妾」を詠んだ十二首と、弟書持の詠一首も含めた十三首の歌群である。以下この歌群を「悲傷亡妾」歌群と呼ぶ(便宜上、①～⑬の番号を付す)。この歌群は、『万葉集』において、人麻呂・憶良・旅人らによつて作られてきた「亡妻挽歌の系譜」に連なる作品とされている。家持がこの歌群を制作する際にそれら先人たちの作品をいかに強く意識していたかについては、先行研究による多くの類似表現の指摘によって明らかにされている。さらに、そういった先行作品に対する意識は個々の表現だけでなく、歌群構成にも現われていることが指摘されている。青木生子氏は、時間の経過に伴う「悲緒」の変化を詠み込んだ構成は、旅人の亡妻挽歌(三四三八～四〇、四四六～五三)に倣った方法であると指摘している。同様に、伊藤博氏も当該歌群が三段構成であることについて旅人歌を参考にしたものであると指摘しているが、一方でその三段構成が「長反歌を盛りこんで変化を

呼んだ」ものになっていることは、家持独自の工夫であるとも述べている。この指摘のように家持は当該歌群において、先行作品の影響を受けながらも独自の構成を目指そうとしていたと考えられる。

しかし、歌群末に置かれた「悲緒末」息更作歌五首⑨～⑬については、すでに坂本信幸氏によつて類型の存在が指摘されている。それは、『万葉集』中にある短歌五首構成の歌群うちの挽歌の例である憶良の「日本挽歌」の反歌五首(五七九五～九九)、余明軍の旅人挽歌(三四五四～五八)、さらに旅人の亡妻挽歌のうちの「天平二年庚午冬十二月大宰帥大伴卿向京上道之時作歌五首」(三四四六～五〇)である。氏の指摘するように⑨～⑬の短歌五首構成に、これら家持周辺の人々による挽歌作品の影響があつたことはほぼ間違いないであろう。その中で「日本挽歌」の反歌五首は、それ以前に前置漢詩文や長歌が存在し、それら全体を結ぶ五首となっている。この点に着目すると、当該五首も同様に歌群全体を結ぶ位置にあり構成上の共通点が認められる。すると、歌群全体の構成としては、坂本氏の指摘の中ではとりわけ「日本挽歌」の反歌五首の影響をより強く受けているという可能性が考えられる。

本稿では、歌群を結ぶ位置にあるという共通点から、特に「日本挽歌」の「反歌」からの影響関係に着目し、それが五首という数の一致だけに留まらないものであることを明らかにする。また、「日本挽歌」の手法を取り入れた当該五首が「悲傷亡妾」歌群全体を結ぶためにどのように機能しているかについても考えてみたい。

一 ⑨⑩⑪における「時間の経過」の意識（一）

当該五首は「悲緒未^レ息更作歌五首」という題詞によって一括されて、「悲傷亡妾」歌群の中に位置づけられている。また、その題詞の中に「更」という語が含まれていることから、先行研究⁸では、当該五首全体とそれ以前の歌群との間に「時間の経過」が認められている。そして、その題詞に添うように、歌の内容もこれ以前の歌群と比較して「時間の経過」を感じられる内容になっているという。

伊藤氏は、五首には「妻の死を過去のこととして見つめる視線」が表現されており、この「我」の心境の変化を根拠として「時の経過」を認めている。心境の変化の表現が「時間の経過」を暗示しているという見方に従うとして、そこで問題となるのは、そのようなこれ以前の歌群からの「心境の変化」が五首中に均質に描かれているのか、ということである。

この問題に関しては、橋本達雄氏の論が示唆に富んでいる。氏は当該五首と「B群」(⑤⑧―筆者注)との間に「時間の経過」を認めつつも、⑨⑩は内容としては「B群」を引き継いだものである一方、⑫⑬では更なる「時間の経過」と内容的に新たな展開が見られるとして、大きく三首と二首に分けられることを指摘している¹²。基本的に従うべき見解と思われるが、「B群」、あるいはそれ以前の歌群との繋がりとこの点から「時間の経過」を考えると、⑨⑩に見られる「時間の経過」と、⑫⑬に見られるものとの間には、橋本氏が指摘する以上にはつきりとした性質の違いがあるように思われ

る。⑨⑩で描かれているのは、氏の述べるようにこれまでの歌群の内容を承け継ぎ、それを基軸とした前後関係による「時間の経過」である。一方、⑫⑬において描かれているのは、もつと積極的な「我」の心中にある「時間の経過」の意識ではなからうか。このことを裏付けるために、まず、⑨⑩について、「我」の心中における「時間の経過」の意識という点から確認する。

⑨において「我」は、「かくのみにありけるものを」と、はかない「妹」の寿命を嘆いている¹³。このような嘆きは、すでに長歌⑤において「うつせみの 借れる身なれば 露霜の 消ぬるがごとく」と喩えられ、「あしひきの 山路をさして 入日なす 隠りにしかば」と、妹がはかなくも「家離りいま」した経緯が過去の出来事として述べられている。当該歌ではそれを承けて、生前の「妹も我も千歳のごとく頼みたりけり」というお互いの将来を頼みにした約束と対比して現在の自分が置かれている状況を嘆いている。

次の⑩は「山隠しつれ」と「妹」の葬送について述べ、すでに諸注で指摘されているように、長歌⑤の「山道をさして 入日なす 隠りにしかば」と、関を置くことができなかったことを後悔する⑦とを承け、「妹」の葬送という同じ過去の出来事を自分の責任であるかのように表現し直したものである。

⑪の「世の中し常かくのみとかつ知れど」も、諸注で指摘されているように④の「うつせみの世は常なしと知るものを」と、長歌⑤の「跡もなき 世間なれば せむすべもなし」とを前提とし¹⁴、さらに、「かく」は当該五首中の一首目⑨の「かくのみ」をも承けていると考えられる。つまり、ここでは「妹」の死によって「我」が実感

した命のはかなさという認識を承け、それを「世間」の「常」として自分を納得させようとする一方で、「痛き心」は忍びがたいものであるという現在の悲しみを示している。この「痛き心」は、長歌⑤で「そこ思ふに 胸こそ痛き」と詠まれ、同じく⑤で「あしひきの 山路をさして 入日なす 隠りにしかば」と詠まれていた「妹」の葬送に起因するものであり、反歌⑥でも「心痛くい行く我妹か」と繰り返されていた。「悲緒未息」であるがゆえに詠まれた五首であるにも関わらず、「我」は三首目⑩でもいまだ「妹」の葬送に起因する「痛き心」に苦しめられているのである。したがって、「我」の中での「時間の経過」の意識は、「なでしこの花」が咲いたことによつて「妹」の死からの「時間の経過」を認識する一方で、それに関わらず「妹」の死後から続く「泣く涙」が「いまだ干なく」と詠まれている⑧から変わらなないと考えられる。¹⁷

以上のことから、⑨～⑪の三首の内容は長反歌⑤～⑧の内容を承け展開させたものであるものの、描かれているのは⑤～⑧と同様の「妹」が「家離りいま」したことによる「我」の「痛き心」であり、そこにこれ以前の歌群からの心境の変化や、「我」の中におけるさらなる「時間の経過」の意識は、いまだほとんど見られない。そして、当該五首において心境の大きな変化が表現されているのは、新たな景である「佐保山」が詠みこまれた⑫⑬であると考えられる。次節においてそのことを明らかにしたい。

二 ⑨～⑬における「時間の経過」の意識 (二)

⑫⑬における「佐保山」の登場は、前半部分の「景」の中心であった「なでしこの花」からの「我」の視線の変化を示し、同時に、妹を偲ぶための空間が「我がやど」から、外の世界である「佐保山」へと拡張されたことを意味する。つまり、⑫⑬は、③⑤⑧に詠まれている「やど」からの場面転換を示す歌として、「悲傷亡妾」歌群全体において大きな意味を持つ。そして、この転換は、「我」の視線や空間の変化を示すだけではなく、心境の変化をも暗示するものと考えられる。たとえば、前述したように影響関係が指摘されている旅人の亡妻挽歌は筑紫の地から都へ帰還する過程で詠まれたものであり、そこでは空間の移動は必然であり、それに伴う対象の変化は当然であった。それに対して当該歌群では、この空間の移動が必然ではない。だからこそ、この「我がやど」から「佐保山」という空間の変化は、「時間の経過」による「我」の心境の変化を示すために取り入れられた方法の一つではないかと推測できる。

「佐保山」について橋本氏は、⑤「山路をさして」、⑩「山隠し」の「山」の位置を具体的に表わした進展¹⁸であり、⑩の葬送時のものから「墓所」である「佐保山」が詠まれていることにより、「時間の経過」が表現されていると述べている。これに従うと、長歌⑤や⑩では「葬送」時を回想していた「我」が、⑫⑬では現実的な埋葬の場所としての「佐保山」を認識しており、そういった「我」の心境の変化を通じて「時間の経過」が示されていると考えることがで

きる。

さらに注目すべきは、「悲_二傷亡_一妾」歌群で初めて「山」が登場する⑤（「山路をさして」）や、「山隠し」が詠まれている⑩では具体的な地名が詠まれず、なぜ、⑫において初めて「佐保山」という山の名が明らかにされているのかということである。たとえば、同時期の家持の作品である安積皇子挽歌では、

： 白たへに 舍人装ひて 和束山 御興立たして ひさかた
の 天知らしぬれ 臥いまろび ひづち泣けども せむすべも
なし (三四七五)

とあるように、最初に「山」が登場する長歌の葬送の場面において「和束山」と具体的な山の名が示され、その反歌でも再び

我が大君天知らさむと思はねばおほにそ見ける和束山

(四七六)

と、詠まれている。また、もう一方の長歌四七八歌では、

： 御心を見し明らめし 活道山 木立の繁に 咲く花も
うつろひにけり 世間は かくのみならし (四七八)

と、皇子ゆかりの「活道山」が詠まれ、さらにその反歌においても愛しきかも皇子の尊のあり通ひ見しし活道の道は荒れにけり

(四七九)

と、「活道」という地名が繰り返されている。また、「亡妻挽歌の系譜」に連なる作品であり、当該歌群と同様に山をよすがとする表現を持つ、高橋朝臣作の「悲_二傷死妻_一」歌¹⁹では、

・… 山背の 相楽山の 山の際に 行き過ぎぬれば 言はむす
べ せむすべ知らに … 言問はぬ ものにはあれど 我妹子

が 入りにし山を よすかとぞ思ふ

(三四八二)

・うつせみの世の事なればよそに見し山をや今はよすかと思はむ (四八二)

といったように、はじめに「相楽山」という地名を明らかにし、その後山が登場する長歌末尾や反歌では「山」とだけ詠まれ、再び地名は詠まれることはない。これらの例と比較すると、当該歌群において⑫で初めて具体的な山の名が明らかにされる方法が特異なものであることが分る。しかし、これと同様の方法はすでに柿本人麻呂の「泣血哀慟歌」において用いられている。第一歌群の反歌である二〇八歌において「妹を求めむ山道知らずも」とあり、「妹」が彷徨っているはずの「山道」が分らないという表現に添うように地名が明らかにされていない。その上で、第二歌群の長歌二一〇歌では「大鳥の 羽易の山に 我が恋ふる 妹はいますと 人の言へば」と、その山について第三者が教えてくれたという設定で具体的な地名が明らかにされている。当該歌群においても、⑦で「出でて行く道知らませば」と、死後の「妹」の行方を知らないという設定で詠まれており、このような方法を「泣血哀慟歌」に学んだ可能性も考えられる。そうであれば、なおのこと⑫における「佐保山」の明示は何らかの意図が含まれたものと考えられる。つまり、具体的な地名を明らかにしない方法には、「妹が見し我がやど」という「妹」の生前にゆかりの場所に執着する余り、死後の「妹」の居場所である「佐保山」を受け入れることができない「我」の心境を描く意図があったのではなからうか。そして、⑤や⑩において敬避表現として用いられている死者が行き着く場所としての観念的な「山」を、「我」の

視線が向けられる景として示すために、⑫においてはじめて、「佐保山」という地名が明らかにされたのではなからうか。それはまた、⑤では「そこ思ふに 胸こそ痛き」と表現され、思うだけでも苦しかった「妹」の葬送であつたのに対し、具体的な埋葬場所である「佐保山」にようやく目を向けることができたという「我」の変化を示していると考えられる。③⑧において「なでしこの花」が咲いたことにより「時間の経過」を表現している方法とは異なり、⑫⑬では「山」そのものが変化するのではなく、その「山」をどのように認識するかという「我」の心境の変化によって「時間の経過」が描かれているのである。

さらに、⑫⑬には「我」の心境の変化を示すものとして注目すべきものが詠まれている。それは、⑫における「霞」と⑬における「奥つき」である。「霞」については、橋本氏が「秋の深まり」を示す自然現象とみなして、⑨⑩からの更なる「時日の経過」の根拠としている。ただし、氏がその根拠としている秋の「霞」が詠まれた「万葉集」中の例は、

・秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつへの方に我が恋止まむ

(2八八)

・霞立つ天の川原に君待つとい行き帰るに裳の裾濡れぬ

(八一五二八／秋雑歌)

・朝霞鹿火屋が下に鳴くかはづ声だに聞かば我恋ひめやも

(10二二六五／秋相聞)

の三例のみであり、これらには秋の深まりを積極的に示すような例は見られない。そもそも秋の「霞」の用例自体が多くはない。²¹「霞」

の『万葉集』中における約八〇例のうち、春の霞を詠んだものは六〇例程あり、特に万葉第四期になると「霞」が春のものという観念が固定しつつあるといえよう。しかしながら、⑫の場合は「春霞」とも表現されておらず、他に春の風物が詠まれているわけでもなく、春の歌と断定することもまた難しいと思われる。この「霞」については、『万葉考』以来多くの注釈書が特に季節を限定することなく、「火葬の煙」を連想させるものと解釈している。その根拠となるのは以下の人麻呂の例であろう。

・こもりくの泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ

(3四二八)

・山の際ゆ出雲の児らは霧なれや吉野の山の峰にたなびく

(四二九)

これらは、それぞれの題詞に「土形娘子火葬泊瀬山時」(四二八)、「溺死出雲娘子火葬吉野時」(四二九)、と火葬時の作品であることが示され、四二八歌の「雲」、四二九歌の「霧」が火葬の煙を喻えたものとされている。また、後代の例ではあるが家持も、

ま幸くと言ひてしものを白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも

(17三九五八)

と、長歌において「佐保山に火葬す。」という注が付されている弟の死を「白雲」となって「立ちたなびく」と表現している。もつとも、当該歌では「見るごとに泣かぬ日はなし」と、「霞」を見て「妹」を偲ぶ日々を振り返っているものであり、直接「火葬の煙」を連想して詠んでいるのではないという違いがある。そのように火葬されたことが明確でない場合でも、建王を今城谷に葬った後に斉明天皇が詠

んだとされる歌謡では、

今城なる小丘が上に雲だにも著くし立たば何か歎かむ

〔日本書紀〕²³ 卷第二十六、斉明四年五月

のように、建王本人にもう逢えないことを受け入れた上で、その身代わりとなる「雲」さえも現われてくれない嘆きを詠んでいる。また、人麻呂の死に際して妻の依羅娘子が詠んだとされる歌でも、直に逢はば逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲はむ

(2二二五)

のように、死者と直に逢えない状態で身代わりとなる「雲」の出現を願っている。これらの例から、火葬を前提とせずとも、「雲」のような特に墓所など死者に縁のある場所に発生するものが亡き人のようになるとしていることが確認できる。

また、『万葉集』中の「霞」の例のうち、当該例のように亡き人や、遠く離れた人のよすがとした例は、管見の限り、

こもりくの泊瀬の山に霞立ちたなびく雲は妹にかもあらむ

(7一四〇七)

という挽歌の一例のみである。この例では「霞」から「立ちたなびく」ものが「雲」と表現され、それが亡き人の幻影と見なされている。また、この歌は前掲の四二八歌から発想を得ていることが指摘され、「火葬の煙」を「霞」に喩えているとされている。この歌や、後代ではあるが家持自身の例である三九五八歌に照らしてみても、当該歌の「霞」も「火葬の煙」を連想させるものと考えてよいと思われる。また、それを見て「妹を思ひ出」しているのだから、少なくとも、よすがとして認識されていたと考えられる。ただし、「霞」

は、「火葬の煙」、あるいは直に逢えない存在を象徴するものであり、あくまでも「妹」が「死者」であるという認識を前提とするよすがである。その上で注目したいのは、③⑤⑧においてよすがとして詠まれていた「なでしこの花」との性質の違いである。③において「妹が植ゑし」と表現されている「なでしこの花」は、「我」にとつて、生前の「妹」の姿がそのまま重ね合わされるような景物であり、さらにいえば「身体性をより生々しく実感させる」²⁶ よすがであつたと考えられる。それに対して「霞」の用例を見ると、

・大葉山霞たなびきさ夜ふけて我が舟泊てむ泊まり知らずも

(7二二四)

・春されば霞隠りて見えざりし秋萩咲きぬ折りてかざさむ

(10二一〇五)

のように、霞がかかることによつて対象が見えにくく、不確かなものとなることが詠まれることが多い。そういった性質から、

・春霞山にたなびきおほほしく妹を相見て後恋ひむかも

(10一九〇九)

・切目山行きかふ道の朝霞ほのかにだにや妹に逢はざらむ

(12三〇三七)

のように、「おほ」「ほのか」を引き出す序に用いられる例もある。これらの例から、前掲の高橋朝臣作「悲傷死妻」歌において、

： みどり子の 泣くをも置きて 朝霧のおほになりつつ
山背の 相葉山の 山の際に 行き過ぎぬれば

(3四八二)

と、「霧」が生前の姿とは異なる「おほに」という「死妻」の状態の

喩えとして用いられていることと同様に、⑫の「霞」の表現効果について考えることができよう。つまり、「霞」によって思い出される「妹」は、「なでしこの花」によって偲ばれていた「妹」とは異なり、もはや「我」の想念の中でさえ像を結ばない不確かな存在になっていると考えられる。いわば「なでしこの花」は、生前の「妹」の姿に執着する「我」の心境を表すすがであり、一方「霞」は、「妹」を肉体を失ったものとして認識した「我」の心境の変化を示すものであり、このような変化に「なでしこの花」が詠まれた③⑤⑧からの「時間の経過」の意識が示されていると考えられる。

さらに、そのような「時間の経過」は、四句目以降の「妹を思ひ出で」という「妹」への回想を表現している部分にも現われている。五句目では「泣かぬ日はなし」と述べているのだから、「我」の状態としては⑧で「我が泣く涙いまだ干なくに」と悲傷の継続が詠まれていたことと一見何の変化もないように見える。しかし、ここで注目したいのは、それが「霞」を見るたびに「妹を思ひ出で」て泣くと表現されている点である。『万葉集』中において死者に対して「思ひ出づ」が用いられているのは当該歌のみである。用例の多くは相聞歌において見られ、

・さ夜ふけて妹を思ひ出でしきたへの枕もそよに嘆きつるかも

(12二八八五)

・旅にして妹を思ひ出でいちしろく人の知るべく嘆きせむかも

(三二三三)

・春霞 島回到立ちて 鶴がねの 悲しく鳴けば 遙々に
家を思ひ出 負ひ征矢の そよと鳴るまで 嘆きつるかも

のように「嘆く」と共に用いられる例や、
(20四三九八／家持)

・思ひ出づる時はすべなみ豊国の木綿山雪の消ぬべく思ほゆ

(10二二三一)

・思ひ出でてすべなき時は天雲の奥かも知らず恋ひつつそ居る

(12三〇三〇)

のように「すべなし」と結びついた例があり、対象への激しい思いが再認識されたことが「思ひ出づ」によって表現されている。この「再認識」ということは、以下の例に顕著である。

・かきつはたにたふ君をゆくりなく思ひ出でつつ嘆きつるかも

(11二五二二)

・うらもなく我が行く道に青柳の萌りて立てれば物思ひ出つも

(14三三四三)

これらの歌では点線部のように、「思いがけなく」、「突如として」思ひ出されたことが詠まれている。だが、一方でこの「再認識」ということは、波線で示したような「さ夜ふけて」、「旅にして」、「鶴がねの 悲しく鳴けば」、「青柳の萌りて立てれば」、という状況の下で生まれたのであって、当該歌では「佐保山にたなびく霞」を見たことによって、「妹」を思い出している。裏を返せば、その状況下でなければ思ひ出さなかったともいえ、つまり、「妹」への回想が途切れていた状態にあったことが前提となっている。その点からいえば、「思ひ出づ」という表現は挽歌には適していないようである。通常、挽歌では、

明日香川 明日だにへに云ふ「さへ」見むと 思へやもへ

に云ふ「思へかも」 我が大君の 名忘れせぬへに云ふ「名忘れえぬ」 (2一九八)

のように、死者の存在が忘れられないことが詠まれ、

ひさかたの天知らしぬる君故に日月も知らず恋ひ渡るかも

(2二〇〇)

のように、「日月」が経つことも忘れた死者への哀悼の継続が詠まれる。当該歌群においても、⑧では悲傷の継続が詠まれ、「悲緒未_レ息更作歌五首」の前半⑨⑩もそれを引き継ぐものであった。ところが、⑫では、「佐保山にたなびく霞」を見ると条件の下で、「我」は「妹を思ひ出で泣く」という状態になっているのであって、一見「見る」とに泣かぬ日はなし」という日常的に繰り返される悲哀の表現によって哀悼の継続が詠まれているようでも、「思ひ出づ」という表現があることによって、今や「我」が「妹」を意識することが断続的になっている状態が想定できる。たとえば、

瀧の上の三船の山は恐れど思ひ忘るる時も日もなし

(6九一四)

というように一時も忘れることがないという状態とは異なるのである。それは、同様に泣く「我」の描写でも「我が泣く涙いまだ干なく」と、「妹」の死後の時間の経過に反する悲傷の継続を示した⑧からの変化を示している。家持は「思ひ出づ」という表現を用いて、死の直後からの経緯を描いた挽歌作品がほとんど対象としなかった、悲傷が断続的になるような期間までを対象とし、それに伴う心情の変化を描こうとしたのである。

最終歌である⑬では、「奥つき」としての「佐保山」が詠まれてい

るが、ここにおいても⑫と同様に「時間の経過」の意識が暗示されている。この場合、注目したいのは「佐保山」を「奥つき」とみなす「我」の心境である。「奥つき」の『万葉集』中の例は当該例を除き九例ある。²⁸それらの「奥つき」について村田正博氏は、当該例以外はいずれも「伝説上の人物や神代にまでさかのぼる祖先といった、きわめて古い世の人」の墓（あるいはその跡）として詠まれており、「死者が鎮まり幽界の生活をいとむところと意識され築かれた古墳墓」としての「厳肅な印象が封じ込められた」語であると述べている。そして、唯一「墳墓」を詠んだものではない当該例は一見例外的に見えるが、あえてこの語が選ばれたのは「亡妾へのいとおしみを表現するためであり、「そこに鎮まる死者に対する親しみと畏敬をこめる語」としての「奥つき」の本質に違うものではないと述べている。全体的に見て、この村田氏の指摘に従うとして、その場合当該例の「奥つき」は、廣川晶輝氏が指摘しているように、「死者」となった「妹」という認識を前提として用いられていることに注意する必要がある。

ここで、⑬と同様に死者の近親者やそれに準じる者によって、葬られた場所が詠まれた挽歌の例を見てみたい。「移_レ葬大津皇子屍於葛城二上山_二之時大来皇女哀傷御作歌」では、

うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟と我が見む

(2一六五)

と、「二上山」そのものを「弟」の代わりとして見ることが詠まれている。また、前掲の「悲傷死妻」歌の四八一歌では「我妹子が入りにし山」を「よすか」と思うことが詠まれ、「河内王葬_二豊前國鏡

山之時手持女王作歌」でも、

大君の和魂あへや豊国の鏡の山を宮と定むる

(三四一七)

のように「宮」として表現され、それぞれ敬避された婉曲な形で詠まれ、「奥つき」や「はか」と表現する例は見られない。さらに、題詞に「但馬皇女薨後穂積皇子冬日雪落遥望御墓」悲傷流涕御作歌一首とある二〇三歌においても、歌の表現としてその「墓」は「吉隠の猪養の岡」とだけ詠まれ、また、「寒からまくに」と、そこに死者がまだ生きているかのように表現されている。唯一、天智天皇の挽歌である「従山科御陵退散之時、額田王作歌一首」では、やすみしし わご大君の 恐きや 御陵仕ふる 山科の 鏡の山に 夜はも 夜のことごと 昼はも 日のことごと 音のみを 泣きつつありてや ももしきの 大宮人は 行き別れなむ (二一五五)

と、「大宮人」が仕える場所としての「陵(はか)」が詠まれているが、それはさすがとして詠まれてはいない。また、この長歌において額田王は天皇の后としての立場ではなく、「大宮人」に代表されるような公的な感情を詠んでいると判断できる。³¹ よって、近親者やそれに準じる者によって詠まれた挽歌では、死者が葬られている場所が詠まれてはいても、そこを直接「奥つき」や「はか」とは詠まず、婉曲な表現を用いることが一般的であるといえよう。それに対し⑬の「奥つき」は、原文において「奥櫛」と表記され、村田氏によって指摘されているように、「櫛」は「倭名類聚抄」に「周棺者也」³³とあり、墓所のイメージを強く背負ったものである。よって、「奥つき」という言葉が近親者による挽歌において用いられている当該歌

については、あくまでも「妹」を死者として認識している冷静な視線についても読みとるべきであろう。そして、そのようなものとして「佐保山」を見つめる当該歌においても⑫と同様に、「我」が「妹」を死者として明確に認識するに至った心境の変化が示され、それによって「時間の経過」が暗示されていると考えられる。

以上のことから、当該五首の後半⑫⑬の二首には、「霞」、「奥つき」としての「佐保山」という新たな景物が詠まれ、加えて、悲傷が断続的になっていることを示す「思ひ出づ」という表現が用いられていることによって、「時間の経過」の意識が確認できる。また、五首全体としては、⑤⑧で示された私の「痛き心」を承けつつ展開させた⑨⑪と、長歌⑤からの「時間の経過」を含んだ「我」の心境の変化を描く⑫⑬という二段階に分けられる構成となつていて考えられる。「反歌」⑥⑧がある上に、「更」に歌い継ぐという構成が果たしていた役割は、最終的にはこの「時間の経過」を描くためであつたといえよう。

三 「日本挽歌」の反歌からの影響

しかし、「時間の経過」と共に変化する私の心境を描くことを意図したものでありながら、なぜ、最後の二首⑫⑬だけでなく、長歌⑤や反歌⑥⑧と心情的に重なる点がある⑨⑪の三首を含んだ五首構成となつているのであろうか。橋本氏の指摘のように歌群全体のバランスを取つたためということも当然考えられるが、当該五首がこのような二段階の構成になつたことには、「日本挽歌」の反歌の構

成に学んだ結果が作用しているのではなからうか。その根拠として、五首の内容を二段階に構成する「日本挽歌」の反歌の方法との類似ということがある。

日本挽歌一首

大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす 慕
ひ来まして 息だにも いまだ休めず 年月も いまだあらね
ば 心ゆも 思はぬ間に うちなびき 臥やしぬれ 言はむす
べ せむすべ知らに 石木をも 問ひ放け知らず 家ならば
かたちはあらむを 恨めしき 妹の命の 我れをばも いか
せよとか にほ鳥の 二人並び居 語らひし 心背きて 家離
ります

反歌

家に行きていかにか我がせむ枕づくつま屋さぶしく思ほゆべし
も (七九五)
はしきよしかくのみからに慕ひ来し妹が心のすべもすべなき
悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごと見せましもの
(七九六)
を (七九七)

妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに
(七九八)
大野山霧立ち渡る我が嘆くおきその風に霧立ち渡る (七九九)

右の「日本挽歌」の反歌については、五首という『万葉集』中でも

数少ない反歌の形であり、その内容と長歌との関係についていくつ
かの先行研究が存在する。そして、その多くがこの反歌について、
当該五首^⑨と^⑬と同様に一体ではないことを指摘している。たとえ
ば、中西進氏は、長歌と緊密な反歌の第一首から第三首には大きな
時間の隔たりはないとみなし、一方、残りの二首については「後日
の詠を添えてたてまつったもの」と判断して、第三首と第四首との
間に「時間の経過」を認めている。このような「時間の経過」を含
んだ反歌五首の構成の特徴については、平館英子氏、稲岡耕二氏、
小川靖彦氏によっても指摘されている。さらに小川氏は、長歌後段
から第三反歌に至る内容について、「妻が家を出てしまったことへの
痛恨の念が繰返し述べられる」のに対して、第四・第五反歌では、
「長歌から第三反歌にいたるまでとは、異なる抒情を展開している」
と述べている。³⁹この点は先に述べたような当該五首のあり方と共通
するのではないか。また、平館氏が、

時を経た心情は自然に直接的な悲歎から哀傷に移って行く。(中
略) 筑紫の野に花開いた棟の花、大宰府官人にとつて親しい大
野山の霧⁴⁰といった身近な景物に哀傷の心が誘発されている

と述べているように、稲岡氏、小川氏共に四首目の「棟の花」、五首
目の「大野山」という新たな景物の導入による歌の性質の変化を指
摘していることは注目すべきである。当該五首との共通点として最
も明確に指摘できる点がここにあるからである。「日本挽歌」におい
て、第四反歌で初めて登場する具体的な景物である「棟の花」の印
象は強く、それは、この作品を享受した家持にとつても同様であつ
たであらう。憶良が具体的な景物を用いて「棟の花は散りぬべし」

と、「時間の経過」を描いたことに学びつつ、家持は「霞」、「佐保山」といった新しい景物を当該五首の末尾二首に配置して、それによって「時間の経過」に伴う「悲傷」の変化を描こうとしたと考えられる。

むろん「日本挽歌」の「棟の花」と異なっており、「山」という素材はすでに長歌⑤や⑩において詠まれている。だが、前述したように「佐保山」という具体的な地名が⑫で初めて詠まれていることが重要である。観念的な「山」を「我」の視線が向けられる対象として具体的に示すために「佐保山」という地名が明らかにされているのであり、それは「我がやど」の「なでしこの花」からの「我」の視線が注がれる対象の変化という意味を持っている。生前の「妹」にゆかりの「我がやど」の「なでしこの花」から、死後の居場所である「奥つき」としての「佐保山」への変化は、「日本挽歌」でいえば、七九八歌の「妹が見し棟の花」から、七九九歌の「大野山」への変化にも重なる。⑧については、七九八歌の「妹が見し」、「我が泣く涙いまだ干なく」という共通の語句を持つことから、家持がこの歌を踏まえて詠んでいることは多くの先行研究によって指摘され、さらに、結びの⑬における「山」で歌群を結ぶ方法についても、『万葉集釈注』によって七九九歌に学んだことが指摘されている。しかし、それについても単なる模倣の域に留まるものではなく、より明確に悲しみの終結が表現されているといえよう。当該歌群では、⑤に「我がやどに 花ぞ咲きたる そを見れど 心も行かず」と表現され、「なでしこの花」という生前の「妹」を連想させるよすがに對する失望が詠まれていたのに対して、⑬では新たなよすがである

「佐保山」を「愛しき」ものと表現している。これは、窪田「万葉集評釈」が指摘するように「なつかしい物として望むやうに移つて来た心」であり、やがては散つてしまふ「なでしこの花」や、やがては消えてしまふ「霞」とは異なり、永遠に自分が目にすることができる「佐保山」を「妹」の「奥つき」⁴²「死者が鎮まり幽界の生活をいとなむところ」と思うことによって、それは「愛しき」ものとなったのであり、このような「我」の心境の変化によって長い間続いた「悲緒」が鎮まったことが示されて歌群全体が閉じられているのである。

さらに、「日本挽歌」の場合と異なる点として注目すべきは、当該五首は「反歌」ではないということ、つまり、「悲緒未_レ息更作歌五首」という独自の題詞が付された短歌群であることである。吉井巖氏は⑨⑬について、「表現の拡充、長短の対応と言う点から見ればいずれも反歌と考えてよいものではあるが、「作者自身これを反歌とせぬ書式である事は注意すべきである」と述べている。⁴³この指摘は重要であり、こうした形式の選択との関連で、五首に付された題詞の意味するところについて考えてみたい。

四 題詞について

⑨⑬に付けられた題詞「悲緒未_レ息更作歌五首」には、「悲緒」が未だ息まないために、「更」に歌を作ったということ、つまり、五首を作った理由が示されている。すでに伊藤氏が、「更」について、「又」（③題詞）、「又」（⑤⑧題詞）との対応に着目し、①⑬の歌

群認定の理由の一つとしている。⁴⁴この指摘に加え、本稿がこの題詞において着目したいのは「悲緒」という語である。これは、これ以前の歌に付された題詞に見られる「悲傷亡妾」(①題詞)、「悲傷秋風」(④題詞)と対応させたものと考えられるが、注目すべきは、それらには傍点で示したように具体的に悲しみを誘う対象が示されているのに対して、当該題詞では「悲緒」が未だ息まないことだけが述べられていることである。また、「未息」は『万葉集』において他には見られない表現である。類例としては、吉田宣作の八六六、八六七歌に付けられた題詞の「思君未盡重題二首」という例があげられる。これは、筑紫にいたる旅人への思いを綴った書簡と、二首の歌に続けて詠まれた歌の題詞であり、その歌の内容は、

・はろはろに思ほゆるかも白雲の千重に隔てる筑紫の国は

(五八六六)

・君が行き日長くなりぬ奈良路なる山斎の木立も伸さびにけり

(八六七)

のように、旅人がいる筑紫の国への距離的な遠さと、旅人の筑紫滞在が長期にわたっていることを嘆いたもので、それは、書簡部分の「宜戀主之誠、誠逾大馬、仰徳之心、心同葵藿。而碧海分地、白雲隔天、徒積傾延、何慰勞緒。」や、八六四歌の「長恋せずは」といった長い間恋焦がれているという内容に合致するものであり、それらを承け「未盡」と表現されていると考えられる。当該題詞においても同様に、①〜⑧から継続している亡き「妹」への思いがまとめられて「悲緒」と記され、それが「未息」であることが述べられているのではないかとすれば、「悲緒」は①〜⑧において詠

まれてきた「妹」を失った悲しみを総括することばとして機能していると考えられる。

ところで、「悲緒」は『万葉集』中では家持のみが用いた語であり、当該例以外では、越中時代の歌(17三九六二)の題詞に見えるのみである。その意味でも「日本挽歌」の模倣に留まらない家持の独自性が示されているといえ、この用語について検討を加える必要があると思われる。金子『万葉集評釈』は、『万葉集』において、部立ともなっている「正述心緒」の「心緒」や、「怨緒」「戀緒」といったような表現が見られることから、当該題詞の「悲緒」についても「心緒愁緒」などと熟して、軽く添うた語と解釈している。一方『増訂版万葉集全註釈』は、「悲哀の緒の如く続くをいう」と述べている。これはおそらく、「未息」とある題詞に関連する意味を持つ「緒」であると解釈しているのであろう。当該題詞の「緒」の解釈には大きくこの二つがあるが、たとえば、同じ家持の歌の題詞に、「入京漸近悲情難撥述懷一首」(17四〇〇六)という例がある。これは、帰京する家持が越前に残る池主との別れを嘆いた歌の題詞であるが、その思いは単に「悲」しみの「情」と表現されている。同じ家持の作品であるこの例と比較した場合、やはり当該題詞「悲緒」の場合は、同じく悲しみの思いを表現しながらも「緒」の字義を加味して用いていると考えるべきではなからうか。

「緒」の字義については、『説文解字』⁴⁵に「絲端也」とあり、さらに原本系「玉篇」⁴⁷には、

…毛詩續禹之緒 傳曰緒業也 爾雅舒業敘從緒也 郭璞曰謂端緒也又曰緒事也 楚辭欽秋之緒風 王逸曰諸餘也

野王案謂「殘餘」也 説文絲端也又曰「緒事」也 廣雅緒「末」也

とあり、「絲端」という原義から、何か一連の物事、そしてそのはじまり、残り、末といったような比喩的な意味への広がりが確認できる。このような比喩的な意味を持つ上代日本の文献に見られる例としては、『日本書紀』において、

・元年春正月己巳朔、大臣・大連等奏言、皇太子億計、聖德明茂、奉讓「天下」。陛下正統。當奉「鴻緒」、為「郊廟主」、承「統祖無窮之列」、上當「天心」、下厭「民望」。

(巻第十五、顯宗元年正月)

・元年春正月辛酉朔甲子、大伴金村大連、更籌議曰、男大迹王性慈仁孝順。可承「天緒」。

(巻第十七、継体元年正月)

のように、「絲端」の形状に皇統を喩えたと考えられる「鴻緒」、「天緒」といった語が用いられており、これらの「緒」には一連の物事の「末」「端」といった意味が踏まえられている。一方、『万葉集』

中では前述したように、感情的なものを表す語に「緒」が付された漢語の例がいくつか見られるが、初出例は吉田宜の書簡にみえる「勞緒」、他には家持に五例、池主に三例がある。それらの例のうち、池主が家持に対して応えた「更來贈歌二首」に付された書簡に

…面蔭見「射水之郷」戀緒結「深海之村」

(18四一三二)「三三書簡」

という例があり、これは下の「結」という動詞のいわば縁語として「戀」に「緒」が付されて表現されたものであろう。また、

・因作「三首短歌」以散「鬱結之緒」耳

(17三九一一)「一三序／家持」

・悽惻之意非「歌難」撥耳 仍作「此歌」式展「締緒」

(19四二九二左注／同)

という家持の二例についても、第一例では「鬱結」に関連させた「緒」、さらに第二例では、「締」(「もつれ結」⁵⁰「た」)に関連させた「緒」と考えられ、以上三例については、単に軽く添えられたものとも考えることができる。だが、遡ってこの「緒」の初出例と推測できる、巻五にある吉田宜が旅人に宛てたと推定される書簡の中に見える、

而碧海分「地」 白雲隔「天」 徒積「傾延」 何慰「勞緒」

：

⁵¹は、旅人が大宰府に赴任してから数年間継続している「勞」について、「緒」を添えて表現したものと考えられる。これは、父である旅人を通じた形で家持に近い人物が用いていることから注目し、この例についても家持は参考にしたのであろう。

また、「悲緒」については、前述したように当該例の他には家持の歌の題詞にある、

忽沈「枉疾」殆臨「泉路」 仍作「歌詞」以申「悲緒」一首

(17三九六二題詞)

の一例だけである。この題詞では、病のために瀕死の状態であったことが述べられ、長歌においても「うちなびき床に臥い伏し痛けくし日に異に増さる」といったように、日々重くなっていた病への苦しみが詠まれている。また、三九七六〇七七歌に付した書簡には、

一看「玉藻」稍寫「鬱結」 二吟「秀句」已觸「愁緒」

(17三九七六〇七七書簡)

とあり、引き続き病がちであった苦しみを「愁緒」と表現している。さらに、三九七八歌の題詞には「述」戀緒「歌一首」とあるが、その

歌には、

： 別れ来し その日の極み あらたまの 年行き帰り 春花
の うつろふまでに 相見ねば いたもすべなみ しきたへの
袖返しつつ 寝る夜おちず 夢には見れど 現にし 直にあら
ねば 恋しけく 千重に積もりぬ …

とあり、別れて来た日から長い期間にわたって続いている都にいる妻への積もる恋情が詠まれている。これらの家持の用例を見ると、一時的なものではない継続的な感情を表す際に、その感情を示す語を強調するために「緒」を添える場合があるといえよう。そして、その初めての用例が当該歌群⑨⑬に付けられた題詞の「悲緒」だったのである。

一方、この「悲緒」という漢語は、『万葉集』に影響があったと考えられる六朝初唐時代の漢籍にも散見する。夙に、『万葉集攷証』が、

⑦覧物起悲緒 顧己識憂端

(宋・謝靈運「長歌行」 全宋詩卷三)

を指摘し、『新日本古典文学大系』本は、

①宿草易滋 傷恨不減 松檟可拱 悲緒無窮

(梁・任昉「弔樂永世書」『藝文類聚』卷三十四・哀傷)

という例を指摘している。さらにその他、管見に入った例も含め以下にあげる。

⑦宿心不復歸 流年抱衰疾 既成雲雨人 悲緒終不一

(宋・鮑照「登雲陽九里埭」 全宋詩第四卷)

⑧三荊離垢 二仲不歸 麋鹿為曹 更多悲緒

(陳周・弘讓「答王哀書」『藝文類聚』卷三十・別下)

①枕淚眠號 素車不馳 玄壤長隔 欲申悲緒

②其人已謝 昔之諧調脩成 條悲緒

(『廣弘明集』卷二十八・沈約與約法師書)

これらの漢籍に見える「悲緒」の例において注目すべきは、人との別れに際しての悲しみを表現する例が①②④⑤において見られることである(①④については死者との別れ)。さらに、「緒」の原義が踏まえられていると考えられるものは、「悲緒」が「憂端」と対句で用いられている⑦である。「悲緒」の例ではないが、陸機(晋)の「歎逝賦」にも「幽情發而成緒 滯思叩而興端」(『文選』卷十六・哀傷)という「緒」と「端」が対句で用いられている例があり、「わき起くる悩み積もる思は果てしなく続く」(傍点筆者)と訳されている。この例においても「緒」に成るという表現で、「幽情」が未来まで継続することを喩えているのであり、「緒」の字義が確実に踏まえられている。また、①においても「窮ること無し」という文脈で「悲緒」が用いられており、この例でも尽きることのない悲しみを表現するために「緒」が添えられたと考えられる。②においても「悲緒」の「終」とあることから、「悲」をある一定期間続いた感情として捉えた上で「緒」が添えられているのであろう。これらの例から、漢籍においても「緒」の原義「絲端也」を比喩的に発展させて、長く継続する一連の感情を表現するために添えられた「緒」の例があることが確かめられる。よって、家持が当該題詞に「悲緒」という用語を用いるにあたってこれらの漢籍の例を参考にした可能性が高いと考えられる。なかでも①については、『藝文類聚』の「哀傷」の

項目に収載されている例であり、さらに「宿草易_レ滋 傷恨不_レ減」という、去年と同じ草が生えても「傷恨」が無くなることはないという文脈は、当該歌群の⑧の「なでしこの花」が咲いても涙がかわくことはないという表現と類似している。そして、⑧に続く題詞では「悲緒」が「未_レ息」となっており、「悲緒」が「無_レ窮」であるという表現とも類似している。このことから、当該例の「緒」についても一連の物事という字義を踏まえて、息むことのない悲しみを強調する意図を持つて用いられたと考えられる。また、歌群全体の構成から見ると、当該題詞の「悲緒」は①～⑧の悲しみを総括する意味も持ち、それが「未_レ息」とあることによって、それまでの歌群と反歌ではない当該五首との連続性を強く提示するために機能しているのである。

むすび

以上述べてきたことから、「悲緒末_レ息更作歌五首」⑨～⑬は、歌数の一致のみならず、その構成についても「日本挽歌」の反歌五首からの影響を受けているといえよう。その影響は単に短歌五首という歌数の一致だけではなく、「日本挽歌」の反歌が「時間の経過」を含んだ性質の異なる三首と二首の組み合わせであることまで読み取り、それを踏襲するという高い次元で見られるものであった。

また、「反歌」⑥～⑧が据えられている上に「更」に五首を歌い継ぐという構成は、題詞「悲緒」が示すように、「妹」の死による長い期間にわたる「悲傷」の変化を表現するための方法であった。死後

の「時間の経過」を⑧で自覚してもなお、その「悲傷」が終息することがないことを⑨～⑪で執拗に繰り返し、⑫⑬において「我」の中での「時間の経過」の意識が表現されて、長い期間にわたる「亡妻」に対する「悲傷」がようやく終息することが描かれている。そのような「時間の経過」のに伴う「悲緒」の変化を含んだ異質性を持つ短歌五首を共存させるために選ばれた方法が、「日本挽歌」の反歌五首の方法であったのである。

その一方で、当該歌群では「日本挽歌」において反歌の末尾に並べられていた二首に学びながらも、七九八歌を踏まえた歌を長歌⑤に付された「反歌」の最終歌である⑧に据え、歌群全体の最後に七九九歌を意識した⑬を据えている。末尾二首のみで、さすがとなるものが生前にゆかりの景物から、死者としての認識を前提とする景物へと変化することが描かれている「日本挽歌」の方法を乗り越え、「なでしこの花」、「霞」、「佐保山」といった景物の変化に伴う心情の変化が歌群の進行に従って、段階的に推移するように構成されているのである。そして、最後にたどり着いた「奥つき」としての「佐保山」は、①②で詠まれた「妹」の身体を想起させる「ひとり寝」の悲嘆と対比されて、「我」の心の中で「妹」が遠い存在となつてしまったことが示されて歌群は閉じられている。⑫⑬は歌群における新たな展開を示しつつ、歌群全体を意識して据えられているのである。

1 以下の『万葉集』の引用は、塙書房刊『万葉集』CD・ROM

版による(所々私に改めた)。

2 伊藤博氏「内舎人の文学」『万葉集の歌人と作品下巻』へ初出一九七四年一〇月)の認定に従う。

3 青木生子氏「亡妻挽歌の系譜」『青木生子著作集第四卷万葉挽歌論』(初出一九七一年一月)

4 注3論文に同じ。

5 注2論文に同じ。

6 坂本信幸氏「萩の花咲きてありや―大納言大伴卿の薨する時の歌について―」『論集古代の歌と説話』一九九〇年一月

7 伊藤氏は注2論文において、⑨⑩⑪について、語句の対応に着目した上で⑨と⑩、⑩と⑪という「流下型」の四首と、主題を示した最終歌である⑬という構成であると分析し、さらに『万葉集釈注』において、この「流下型」の構成は、余明軍の五首の二首目(四五五)から五首目(四五八)にも見られる構成であると指摘している。この指摘において注目すべきことは、語句や歌数の一致のみならず、当該五首の配置についても先行する作品に学んでいたことを見出した点である。

8 伊藤氏注2論文、橋本達雄氏「亡妻を悲傷する歌」『大伴家持作品論攷』(初出一九七四年一月)、小野寛氏「家持亡妻悲傷歌」『大伴家持研究』(初出一九七八年三月)など。

9 『万葉集釈注』

10 注2論文に同じ。

11 橋本氏注8論文に同じ。

12 小野氏注8論文でも同様の指摘をしている。

13 廣川晶輝氏「悲傷亡妻歌」『万葉歌人大伴家持―作品とその方法』二〇〇三年三月)は、「かくのみにありけるものを」について、「なでしこの花」に寄せた心が変わってしまったはかなさ、無常の世間における人の心のはかなさ」を承けた表現であると述べ、従来とは異なった解釈を提示しているが、五句目の「頼む」の表現内容は「妹」と「我」がお互いの存在を頼りに思うということであり、やはり従来どおり、この表現が示す内容は「妹」の死という事実を指していると考えて良いと思われる。

14 橋本氏注8論文に指摘あり。

15 『日本古典集成』本に指摘あり。

16 松田聡氏「家持亡妻悲傷歌の構想」『国文学研究』一一八、一九九六年三月)は、⑤⑧に詠まれている「花」を③の「なでしこ」と切り離して、「庭に咲く花一般と解釈しているが、①⑩⑪はひとまとまりの歌群であり、やはり「花」は「なでしこ」を指していると考えられる。よって、本稿では「なでしこの花」という用語で、③の「なでしこ」⑤⑧「花」についてまとめて示す。

17 橋本氏も「亡妻挽歌群の表現」『万葉集の時空』(初出一九九四年一月)において、「8ではまだ涙は乾かず、対応する11でも痛い心を抑えかねているのであって、心はまだ癒されていない。」と⑧と⑪で「我」の心境が変化していないことを述べている。

18 橋本氏注8論文に同じ。

19 身崎壽氏「高橋朝臣亡妻挽歌試論」『文教大学国文』六、一九七七年三月)は、家持作品であると分析している。

20 橋本氏注8論文に同じ。

- 21 このことから、山本健吉氏（『窈窕淑女』『日本詩人選5 大伴家持』一九七一年七月）や松田聡氏（注16論文）は、⑫を翌年の春の詠であると主張する。
- 22 城崎陽子氏（『万葉の霞』『万葉集の編纂と享受の研究』（初出一九九七年二月）もまた、当該例について「霞は春」という季節感とは根本的に異なる」用例であるとみなしている。
- 23 以下の引用は、『新編日本古典文学全集』本による。
- 24 窪田『万葉集評釈』
- 25 小野寺静子氏『悲傷亡妾歌考』『坂上郎女と家持―大伴家の人々―』（初出一九七二年一〇月）の見解による。
- 26 倉持しのぶ氏・身崎壽氏「亡妾を悲傷しびて作る歌」『セミナー万葉の歌人と作品第八巻』二〇〇二年五月
- 27 前掲の三九五八歌において家持が、「ま幸くと言ひてしものを」と詠んで、それにも関わらず亡くなってしまうた弟を「白雲に立ちたなびく」という比喻で表現していることも、生前の姿とは異なる状態を捉えたものといえよう。
- 28 四三一、四三二、一八〇一（二例）、一八〇二、一八〇七、一八一〇、四〇九六、四二二一
- 29 村田正博氏「『おくつき』考」『山邊道』二五、一九八一年三月
- 30 廣川晶輝氏（『万葉集』の菟原娘子伝説歌―墓―の表現性）『美夫君志』七三、二〇〇六年一月）は、「墓」という「場所」について、「そこに眠る人の〈死〉という大きな点」を内包しているという要素」と、「死者」が「そこ」に眠っているという要素」を持つていることを指摘している。

- 31 身崎壽氏「天智挽歌群 その二」『宮廷挽歌の世界』（初出一九八六年一月）の解釈に従う。
- 32 注29論文に同じ。
- 33 箋注本巻六調度部・葬送具（七十八才）
- 34 橋本氏注8論文に同じ。
- 35 中西進氏「日本挽歌」『山上憶良』（初出一九七一年九月）
- 36 平館英子氏「日本挽歌・反歌五首」『万葉歌の主題と意匠』（初出一九七三年一月）
- 37 稲岡耕二氏「人麻呂と憶良―かたちを創る―」『上代文学』五七、一九八六年一月
- 38 小川靖彦氏「日本挽歌の反歌五首をめぐる」『稲岡耕二先生還暦記念日本上代文学論集』一九九〇年四月
- 39 注38論文に同じ。
- 40 注36論文に同じ。
- 41 廣川氏は注13論文において、「佐保山」は「我」にとつて「妹を偲ぶ永遠のよすが」として位置づけられたことを指摘している。
- 42 注29論文に同じ。
- 43 吉井巖「反歌攷序説」『万葉集への視覚』（初出一九五八年一月）の注
- 44 注2論文に同じ。
- 45 小野氏注8論文に指摘あり。
- 46 『説文解字注』（藝文印書館）
- 47 『原本玉篇残卷』（中華書局）
- 48 「右五首賁人余明軍不勝犬馬之慕」心中感緒作歌」（三四五四

〔五八左注〕、「新田部親王出遊于堵裏御見勝間田之池」〔感緒御心之中〕（16三八三五左注）については、動詞として用いられているので、考察の対象としない。

49 この他、上代の例としては『懷風藻』（大系本）にも、「山際愁雲斷人前樂緒稀」（刀利宣令「秋日於長王宅宴新羅客一首」）や、「草也樹也揺落之興緒難窮」（下毛野朝臣蟲麻呂「秋日於長王宅宴新羅客一首」）といった例がある。

50 『日本古典全集』本に、「古本『玉篇』に『結也、説文、不_レ解也』とある」と指摘あり。

51 この「勞緒」が旅人の大宰府での苦勞を指すのか、宜自身の「傾延」の心を指すのか説が分かれているが、やはり、旅人宛の書簡であることを考えると、旅人の苦勞を、遠く離れているために慰めることができないと解釈すべきであろう。

52 池主の例では、「以吟以詠能獨戀緒」（17三九六七～六八書簡）において、長い間家持に会えずに慕っている思いが「戀緒」と表現されている。また、「生別悲兮斷腸万廻怨緒難禁」（17四〇〇八～一〇題詞）についても、家持との「生別」の「断腸」の思いが「万廻」も起こっていることに関連させて「怨緒」としたと考えられる。

53 以下丁福保編『全漢三国晋南北朝詩』による。

54 『藝文類聚』（中華書局）による。

55 大日本校訂『大藏經』による。

56 注55に同じ。

57 『全釈漢文大系文選二』による。

58 『全釈漢文大系文選二』三〇二頁の「通釈」による。

（はらだ なおみ・北海道大学大学院博士後期課程）